



日本橋三越近くにある、お江戸日本橋亭に若手落語家3人による「三日月の会」をききに行った。初めて見る柳亭（りゅうてい）こみちさんはショートカットに着物姿もきりりときまっていた。演目は古典落語「風呂敷」。長屋に住む夫婦の滑稽な話を実によく通る声で小気味よく、酔っ払いの表現も秀逸だった。こじんまりとした寄席には若い女性客も多く、最近の落語人気を窺わせた。

柳亭こみち（本名・高橋愛）さんは3年9カ月間の修行を終え、1昨年11月二つ目に昇進。将来が期待される女性落語家だ。小平市に生まれ、小学校入学時に東村山に転居。6年生の時は校内の代表委員長も務めるほど活発な少女だった。国分寺高校から早稲田大学へ入学。当初の夢は日本と外国の架け橋になるようなメディア人。在学中

初めてきいた落語にイナズマが走り… 会社員から落語家の道へ 柳亭こみち

カリフォルニア大学に留学した経験も持つ。

卒業後は出版社に就職。仕事も順調で青春をエンジョイしていた。ある日、好きな芝居の当日券が取れず、ふと新宿末広亭に足を向けた。そこできいた初めての生落語…これが運命の分かれ道だった。

「柳家小三治師匠の高座をきき、イナズマが走ったのです。こんな芸能があったのかと、落語を知らずに来たそれまでを後悔しました」

大学時代にかじっていた演劇と違い、一人ですべてを表現する伝統芸能の奥深さに魅了され、寄席通いをするうちに、仕事で使う左脳よりも、落語を聞いて心動かされる右脳の比重が大になり「落語家になる！」と決心した。それからがこみちさんのド根性物語の始まり…。

弱かった扁桃腺を切除する手術も受け入門準備。小三治一門の柳亭燕路（えんじ）さんに弟子入りすべく、手紙を書き、寄席で燕路師匠が出てくるのを待って志願した。最初は「君が男だったら弟子にとる」と断られた。しかし「念ずれば通ず。なれないことはない。マイナス志向を捨てる」と決めたから、こんなことでは諦めない。そして2ヶ月後のある日ついに入門

が許された。「君を弟子にする。明日来なさい」と。

晴れて弟子入り、けれども憧れの落語家への道は辛く険しかった。東村山の自宅を朝5時に出て、師匠の家に通い、帰り着くのは夜中の12時、1時頃。とにかく眠くて、各駅停車の電車内で舟をこいで柱に頭をぶつけながら帰る毎日だった。徹底的に掃除を仕込まれ、常に師匠の身の回りの世話をし、落語の稽古はなし、の1年を夢中で過ごした。寝不足で倒れたこともあった。この頃から師匠宅の近くに住むようになった。

落語の世界は厳しく、上の人は一切言い訳できない。「頑張るしかない」と心を鼓舞しつつも自分のふがいなさに涙したときも。そんな時は同僚意識で結ばれた前座仲間の存在が救いだった。

二つ目以上の女性の噺家は10人しかいない。だからすぐに名前を覚えてもらうのが利点だ。しかし女の噺家には稽古はつけないという師匠もいるし、古典落語そのものが男の視点で語られるというハンデもある。だからこそ女性の応援も熱烈だ。

「地元東村山では近所の方々が無条件に応援してくださってうれいんです。入門に賛成してくれなかつた父が前座の頃初めて見に来てくれ、生き生きした顔してると驚いて今では励ましてくれます」とうれしそうに語る。澄んだ瞳がキラキラしていた。

「古典落語をしっかりとできる噺家になること。1回1回の高座にベストを尽くす。それが厳しく仕込んでくれた師匠への恩返しです」

向かうは真打への道。ガンバレ！こみちさん。期待していますよ。

こみちさんの落語はこちらで

◆8/17（日）15時「高円寺ノラヤ寄席」¥3,000（フリードリンク付要予約） ☎03（3310）2020（ノラヤ）

◆8/26（火）19時「てん五会こみち独演会」前売¥500 当日¥800 羽村市生涯学習センターゆとりぎ ☎045（70）0707

◆9/6（土）18時15分「日本演芸者手研精会」国立劇場演芸場 前売¥1,000 当日1,500 ☎03（5721）53335（オフィスM's）

◆9/28（日）14時「三日月の会」お江戸日本橋亭 ¥1,000（当日のみ） ☎03（3245）1278 お江戸日本橋亭